

アート・ドキュメンタリー映画 EXPO'70 前衛の記憶 ～アコを探して

製作報告 (ver.3)

(KONANプレミア・プロジェクト/V KONAN研究力展開プロジェクト)

甲南大学 人間科学研究所

所長 川田 都樹子



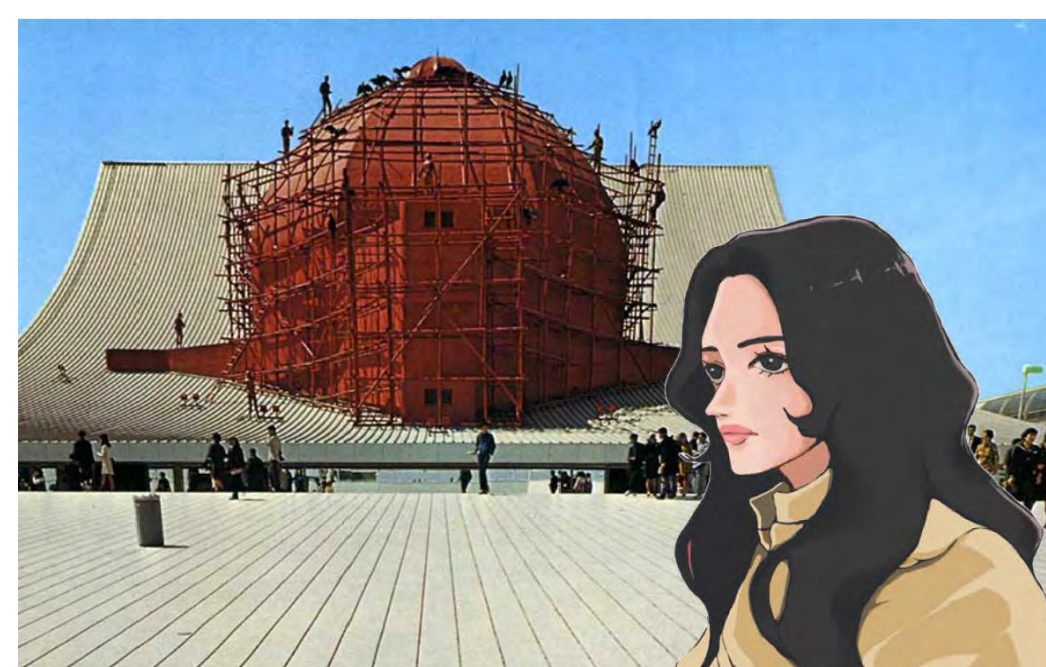
出演：甲南大学 学生(卒業生)／メインキャスト：5名
(基礎共通教育科目「芸術史」受講生：20名)

監督：寺嶋真里(映像作家)

上映：2025年大阪・関西万博 / 関西パビリオン
7月19日・20日・21日 兵庫県ゾーン
(甲南大学オープンキャンパスでも学内で公開予定)



映画のあらすじ



EXPO'70の「せんい館」と「アコ」のイメージ
背景画像提供：木の情報発信基地

「甲南大学の授業でEXPO'70を調査研究するプロジェクトが始まった。」
そのプロジェクトに参加した甲南大生の「アコ」が、EXPO'70の「アコ」を探す物語。

EXPO'70(1970年の大阪万博)には「せんい館」というパビリオンがあった。
そこで、松本俊夫監督の映像作品「スペース・プロジェクション・アコ」が公開されたという。
「アコ」とは、当時20歳のヒロインの名前だった。

現代を生きる甲南大生の「アコ」とその仲間たちは、

- ・授業で、プロジェクトチームに加わり、研究調査を重ねながら、
- ・専門の研究者の講演を聞いたり、討論会に参加したり、
- ・当時を知る人をたずねてインタビューしたり、
- ・様々な当時の文献や映像資料を探索・閲覧・調査しながら、

皆で協力しあって、EXPO'70とその時代について徐々に深く知っていく。



Photo:Hitoshi Iwakiri
現代の甲南大学生「アコ」と仲間たち

やがて、「アコ」は1970年に生きた若者たちの姿を幻視しはじめ、1970年の「アコ」を尋ねて彷徨する。
その幻想に仲間たちも次々に感染していき、そのまま皆が、EXPO'70の狂騒の時代にタイムスリップ!?

1970年、大阪万博の熱気の中で、あの頃の日本人が抱いた「未来」への希望...

「あの頃」にとっての「未来」を「今」として生きていた「アコ」たちは、

「あの頃の夢」を「我がこと」として受けとめて、これから生きていかなければならない。

彼らは、この調査・研究プロジェクトの中で、何を知り、何を見出していくのだろうか。

「アート・ドキュメンタリー映画 EXPO'70 前衛の記憶〜アコを探して」製作報告

(KONANプレミア・プロジェクト/V KONAN研究力展開プロジェクト)

甲南大学 人間科学研究所

所長 川田 都樹子

「アート・ドキュメンタリー映画」製作プロジェクトの背景

★ EXPO2025 大阪・関西万博に向けて、EXPO'70 大阪万博の成果を振り返ろう

2025年日本国際博覧会（EXPO2025 大阪・関西万博）の開催に際し、これに先立つ1970年の大阪万博（EXPO'70）を振り返り、その時代と思想、その意義と成果を再検証し、それらを現在へと引継ぎ、未来へと繋いでいくことが大切だと思います。

★ 当時を知らない学生たちによる、EXPO'70 大阪万博の調査・研究

1970年の大阪万博（EXPO'70）は「人類の進歩と調和」をメインテーマとし、アジアで初めて開催された国際博覧会でした。それはまた、原爆投下による終戦から25年を経た「敗戦国ニッポン」での万博であり、米ソ冷戦のさなかにあって、「恒久平和への希求」とともに、決して楽観的な進歩思想ではなく、実は、今でいう「ダイバーシティ」（多様なもの同士の「調和」）の理念をも先取りしていました。EXPO'70の真の理念とその時代の日本や世界の状況について、甲南大学の学生が自ら体験的・積極的に研究・調査することで、当時を知らないからこそその新たな視点や様々な気づきが生まれていきます。



画像: <https://acworks.co.jp/> (Photo AC)

★「最先端テクノロジー」と「前衛芸術の祭典」でもあった、EXPO'70 大阪万博

原子力発電、携帯電話、電気自動車、リニアモーターカー、エアドーム建築など、今日の日常を形づくっている技術が初登場したのも EXPO'70でした。また、様々なメディアの間を横断する「インターメディア」というべき芸術活動が爆発的に展開・噴出し、そこに当時の先端テクノロジーが導入され、まさに国家的レベルの文化事業として多くの前衛芸術が発表されたのでした。特に複数の映写機をコンピューターで一括制御して大音響と共に「マルチスクリーン」に映し出すタイプの作品が数多く発表され、注目を集めました。



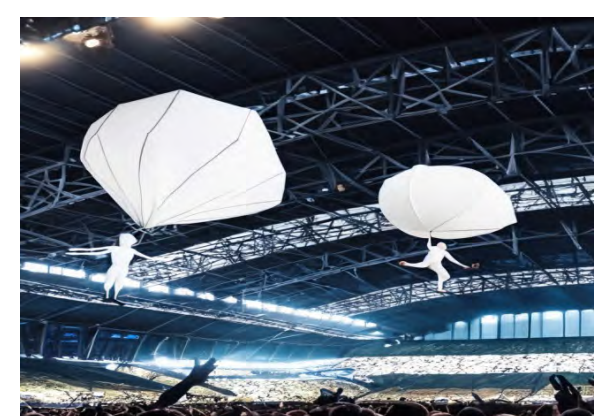
(例)「みどり館」の「アストロラ」
ドーム形の半球の内部はすべてがスクリーン。5 台の映写機から5本のフィルムを同時に映写する仕組みによって全視野映像を実現した。

画像: https://www.flickr.com/photos/k_oota/5789126706/
制作者: ©kouji OOTA, Flickrより

★ EXPO'70 大阪万博 を経験した世代、参加した前衛芸術家たち

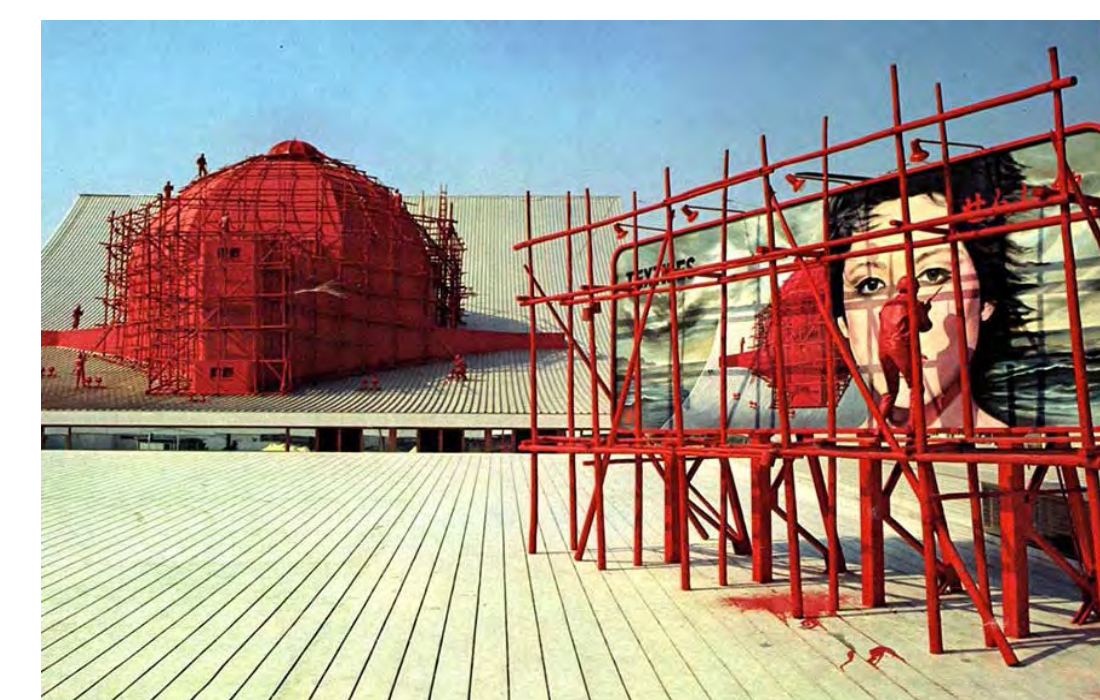
甲南大学の教職員や名誉教授、同窓OBには、EXPO'70にまつわる懐かしい思い出をお持ちの方も多く、そうした先輩方との交流の機会を得て学生は多くを学んでいきます。

甲南の近くに横尾忠則現代美術館がありますが、前衛芸術家の 横尾忠則（1936- ）は、EXPO'70 の「せんい館」の設計者です。その巨大なドーム内部には横尾制作の巨大な女性像の部分彫刻群が取り付けられ、それらも含めドーム全体が映像スクリーンだったそうです。そのロビーには、芸術家 四谷シモンの人形「ルネ・マグリットの男」が 15体も設置されていました。そのうちの1体は、現在、大阪大学中之島センターで見ることができます。

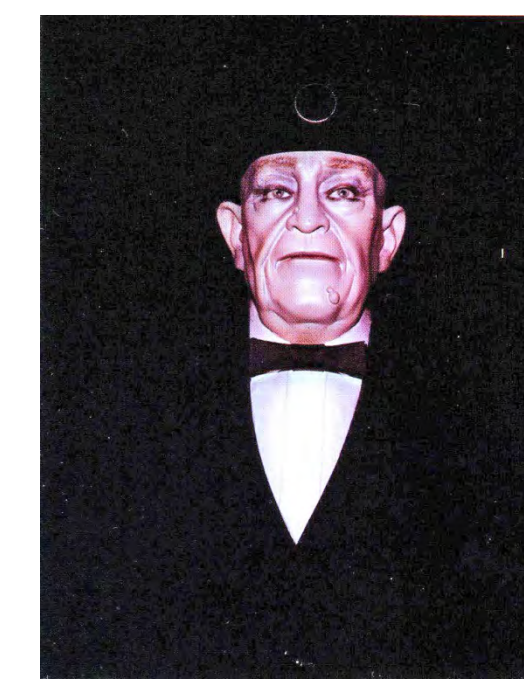


具体美術まつりでの気球で宙を飛ぶパフォーマンスのイメージ

また、EXPO'70に協力参加した前衛芸術家集団「具体美術家協会（1954-1972）」は、甲南大学からほど近い芦屋を拠点としていました。その史料や作品は、芦屋市美術博物館や兵庫県立美術館、大阪中之島美術館、国立国際美術館等々で見ることができます。



横尾忠則 設計の「せんい館」



「せんい館」ドーム内部 と 四谷シモン「マグリットの男」

上:「せんい館」画像/木の情報発信基地より 下2つ:写真/遠藤正

★「せんい館」で前衛映像を発表した松本俊夫監督、その弟子の寺嶋真里監督

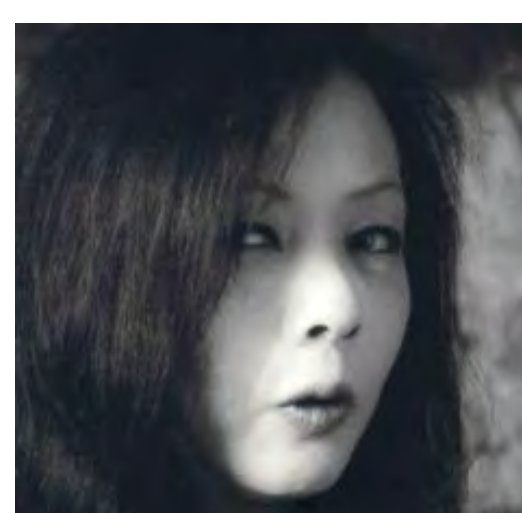


Photo: Kyo Nakamura
寺嶋真里



Photo: Yoshitaro Inami
松本俊夫

「せんい館」の総合プロデュースは、日本の前衛映画を牽引した松本俊夫監督（1932-2017）。松本俊夫の映像作品「スペース・プロジェクトン・アコ」は、ドーム内と壁面全体に投影されました。10台の大型映写機、10台のスライド、8トラックのシネコーダー、ドーム内の周囲の壁、天井、床面などに埋め込まれた50個以上のスピーカー、全てがコンピューターで制御され観客を圧倒しました。主演の「アコ」はオーディションで約300人から選ばれた、当時20歳の女性でした。

一方、私たちの映画製作プロジェクトで監督を務めるのは、松本俊夫の弟子として活躍中の映像作家、寺嶋真里（1965- ）です。数々の国際映画祭にも招待上映されてきた、アヴァンギャルド&アンダーグラウンド映像の実力派アーティストのひとりです。

日本では、EXPO'70を頂点として、アヴァンギャルドもアンダーグラウンドも衰退したとしばしば言われてきました。しかし、松本俊夫の精神を受け継ぎ今日に伝える映像芸術も確かに存在しています。そのことをも作品で証明したいと考えています。

人間科学研究所 映画製作プロジェクトの概要（報告と計画）

★ 監督：寺嶋真里、出演：甲南大学生。芸術映画の製作



Photo:Hitoshi Iwakiri

人間科学研究所では「KONANプレミア・プロジェクト/V KONAN研究力展開プロジェクト」として、新作映画の製作を、映像作家、寺嶋真里に委託しました。本プロジェクトは、この映画製作と、学生のEXPO'70に関する学び（調査・研究）とを連動させようという試みです。

松本作品の主人公「アコ」を「探す」という比喩表現によって寺嶋監督が描き出そうとするのは、現代の甲南大学の学生たちが、1970年という時代、その思潮、その世相を探索していく姿です。

映画の出演者（キャスト）は甲南大学の学生、メインのロケ地は甲南大学の岡本キャンパス。EXPO2025（大阪・関西万博）会場、関西パビリオン、兵庫県ゾーンで上映いたします。

★ 甲南大学 全学共通科目「芸術史」との連動

2023年度の全学部共通科目「芸術史」（前期開講）の授業を映画製作の場と一体化することを試みました（科目担当教員：川田都樹子、森茂起、友田義行、吉川孝、森年恵）。受講生を組織して班をいくつか作り、「前衛芸術の祭典」でもあったEXPO'70とその時代について学生たちがグループで調査・研究し、その成果を授業内で順次発表し意見交換していきました。

担当教員らも分担でこのテーマについて講義を行いました。さらに、専門の研究者をゲスト講師として招き、授業内で講演会・討論会を開催、もちろん受講生も常に討論に参加しました。

それら全ての授業風景を動画として記録し続けました。この記録動画のすべてを「素材」としつつ、さらに寺嶋真里監督が学外での追加撮影と加工や編集を施し、1本のアート・ドキュメンタリー映画に仕上げていきます。（※ 受講生と教員とゲスト講師、その全員と「肖像権に関する同意書」を交わしています。）



EXPO'70の「ソ連館」のパンフレットを囲んで語り合っている学生研究グループ

★ 貴重な「時代の証人」からの声をあつめる

EXPO'70の関係者は、すでにならりのご高齢になっています。インタビューによってその生の言葉を記録し、後世に伝えること自体、大きな歴史的価値が生じるものと言えるでしょう。



横尾忠則 インタビュー風景

当時EXPO'70に参加した芸術家としては、「せんい館」を設計した横尾忠則、もと具体美術協会会員の今井祝雄、美術評論家・キュレーターの室井絵里、実験映画のジャンルで重要な映像作家である中島崇、居田伊佐雄、映像と身体表現の万城目純、美術家のマンタムらのインタビューを撮影、当時の貴重な証言を収録することができました。

また当時「せんい館」で万博ホステス（コンパニオン）として活躍された方々からも様々なお話を聞くことができました。

他にも、観客として、あるいはアルバイトスタッフとして、EXPO'70を実際に経験したという方々への、学生や教員によるインタビューも、寺嶋監督が丁寧に映画の中に編みこんでいきました。（※ 全員と「肖像権に関する同意書」を交わしています。）



今井祝雄



室井絵里



中島崇



居田伊佐雄



万城目純



マンタム

★ 実力派アングラアーティストたちのコラボでハイクオリティーな映像を



三ツ星レストランの残飯

アングラ系 超絶個性派のアニメ作家「三ツ星レストランの残飯」や、写真家の岩切等、映像クリエイターの大川晃弘といった実力派アーティストの参与によってただの記録映像ではない「アート・ドキュメンタリー」に仕上がりました。

また編集スタッフとして、やはり松本俊夫門下生の映像作家 RIKie が編成した〈チームRIKie〉の優秀なメンバーが本作の完成をサポートしました。



岩切等



大川晃弘

★ 2025年度の上映予定

【2025大阪関西万博】場所：関西パビリオン、兵庫県ゾーン、メインホール（ミライバス）
「ひょうご EXPO week」シンクロイベント：「学びと遊び」※関西パビリオンへの入場予約が必要です。

7月20日（日）：映画上映とトークイベント
12:00 ～15:00

「EXPO'70前衛の記憶〜アコを探して」
「横尾忠則 万博を語る」「1日240時間」

トークイベント出演：寺嶋真里、川田都樹子、
記井美夕、他 甲南大学生・卒業生、白井達郎、友田義行、石川路子（展示監修：井上謙二）

7月19日（土）・7月21日（月）：映画上映のみ
11:30～13:00

「EXPO'70前衛の記憶〜アコを探して」
「横尾忠則 万博を語る」

15:00～15:30 「1日240時間」



甲南大学人間科学研究所_ART
@rnjinkxuyn25170 (X:Twitter)



「映画アコを探して」公式HP
https://www.konan-u.ac.jp/kihs/movie_ako/

【甲南大学 オープンキャンパス】夏季：8月2日（土）、8月3日（日） / 秋季：9月14日（日）
「EXPO'70前衛の記憶〜アコを探して」特別上映会（岡本キャンパス内）詳しくはHPで！

製作・撮影の様子と注目ポイント



X (Twitter) では授業や映画撮影の様子も写真で紹介しています。

★現代を象徴する「マルチカメラ」の試み

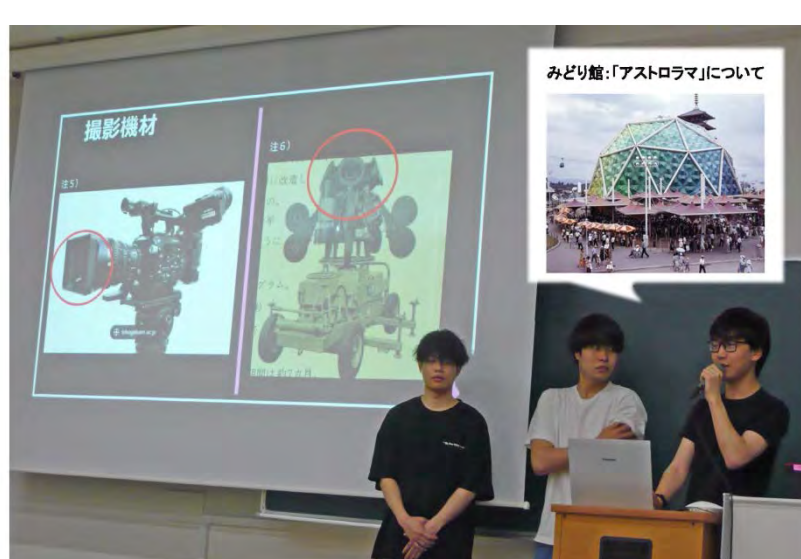


「芸術史」の授業の様子は、常時3台の固定カメラと、撮影スタッフ（学生アシスタント）による手回しカメラ1台と、さらに担当教員のノートパソコンのZoom記録によって動画撮影されました。また、受講学生全員が、それぞれのスマホで、自分の視点から思い思いに授業風景を動画撮影し、それを寺嶋監督に送っています。寺嶋監督が、それを編集して映画作品に組み込んでいきます。同時共存する多数の視点による「マルチカメラ」、おそらく映画史上初の試みです。スマホやSNSに代表される現代、誰もが端末を携帯し常時情報を共有できるこの時代のメディア環境を象徴的に表現する、寺嶋真里監督ならではの実験的試みです。

EXPO'70の多くのパビリオンでは、当時の最先端テクノロジーを駆使した新しい映像表現が発表されました。中でも複数の映写機をコンピューター制御で一斉稼働させて映す「マルチスクリーン」が目を引きました。現代においてそれに呼応するもの、つまり、最新のテクノロジーの在り方を象徴するものこそが「マルチカメラ」である、と私たちは考えています。

★ 学生による授業内での研究発表と考察

共通教育科目「芸術史」の受講生は、班に分かれ、それぞれが次のようなテーマでの調査・研究・発表を行いました。「岡本太郎と太陽の塔」「せんい館と松本俊夫・横尾忠則・四谷シモン」「みどり館のアストロラマ（マルチスクリーン）」「アメリカ館とソ連館（2025年万博へのロシア参加の可否）」「万博反対派—アンチ万博の芸術家たちと学生紛争」「コンパニオンの制服と1970年頃のファッション、ヴィジュアル・カルチャー」。それら動画記録も映画の素材になります。また授業後に学生が書いたコメントや期末レポート等も（本人了承のもとで）映画の素材として公開します。寺嶋監督による個々の学生へのインタビューも学内に仮設された撮影スタジオで収録されました。学生たちが何を学び、何を考え、どこに向かおうとしているのか、学生たちの「学び」が見えてくることでしょう。



★「70年代ファッション」で踊る「ゴーゴー」



70年代ファッションの学生たち

メインキャストの学生の衣装は、サイケデリックな色柄やミニスカート、チューリップハット、ベルボトムのパンツ、ロンドンブーツ、ヒッピースタイル等々、すべて1970年ごろに流行していたファッションです。往年の「ナウなヤング」に扮した学生が、当時流行した「ゴーゴードダンス」に挑戦しました。プロのダンサーが作ってくれた「お手本動画」を参照しながら、プロバンドの演奏にのって、サイケデリックに点滅するライティングのもとで学生たちが乱舞します。

学生たちの70年代イメージをサポートしたのは「平成生まれの昭和女、歌って踊るゴーゴークール」の「踊るミエ」。70年代カルチャーを体現するこの稀有なアーティストが、楽曲提供、ゴーゴードダンス出演から衣装提供・スタイリング監修までこなしています。彼女のバックダンサー「クリーマーズ！」と、クールでゴージャスなエレキバンド「ザ・ジャック・ポッツ」、そして昭和を愛するアーティスト仲間、「斉藤ネロンサイン」、「ダイヤ・ピアノ・サンタ」らも協力してくれています。彼らの「モーレッツ！」な熱風をぜひご堪能下さい。



ゴーゴーに挑戦（大学のギャラリーにて）



奥左：斉藤ネロンサイン、奥中央：「踊るミエ」、奥右：ダイヤ・ピアノ・サンタ。手前：「クリーマーズ！」/左：ライム 右：エマ
Photo:Hitoshi Iwakiri

★ 松本俊夫(映画監督)へのオマージュや、丹下健三(建築家)らのメタボリズムへの言及

EXPO'70の「せんい館」で総合プロデュースを勤め、マルチスクリーン作品「スペース・プロジェクション・アコ」を発表した映画監督の松本俊夫（1932-2017）は、日本を代表する実験映像作家・前衛映画監督の一人として、わが国の前衛芸術を牽引していったアーティストでした。私たちの映画の監督 寺嶋真里は、その松本俊夫の弟子にあたる映像作家ですから、映画「アコを探して」には、故松本俊夫監督への様々なオマージュが散りばめられているかと思えます。それを発見するのも、コアな映画ファンにとっては醍醐味となることでしょう。

「芸術史」の授業では、戦後映像芸術アーカイブ（PJMA）の阪本裕文氏から供与いただいて、「幻の名作」である松本俊夫「スペース・プロジェクション・アコ」を鑑賞することもできました。（2025大阪関西万博では、松本俊夫作品の上映はありませんが、EXPO'70の「自動車館」で放映された「1日240時間」を同時上映することになりました。どうぞお楽しみに！）

他にもEXPO'70の前衛的な芸術表現への言及は様々なレベルで私たちの映画の中に隠されています。例えば、太陽の塔の周りにあった大屋根は、建築家の丹下健三（1913-2005）が考案した未来都市のプロトタイプで「メタボリズム（新陳代謝）」により無限増殖しうる、ユニットの集合体でした。現代人にとって、この無限増殖のイメージはスマホやSNSのメディア環境にむしろ近いでしょう。本作の「マルチカメラ」はその表れでもあるのです。



太陽の塔と大屋根 画像/木の情報発信基地より